

福島安紀子著「人間の安全保障 - グローバル化する多様な脅威と政策フレームワーク - 」

千倉書房 2010年9月23日刊を読む

政府フレームワークとしての「人間の安全保障」

1. 定義をめぐる対立軸が少しずつ解け始め、「人間の安全保障」という言葉は次第に国際社会に受け入れられるようになってきている。定義上のコンセンサスの追求は不毛であり、もはや主眼は如何に実践するか(operationalize)に移っている。それは「人間の安全保障」と明言せずに活動を実践することを主張する関係者が増えている(We don't talk human security but do human security)ことにも跡づけられる。ラベルを貼らずとも、対象に優先順位をつけ、機能的実践や協力を進める方が現実的であるとの認識も広がってきている。こうした実践のひとつが第7章で論じた平和構築であった。
2. 国家のみならず、市民社会は「人間の安全保障」の重要な担い手である。故小淵恵三首相は、「人間一人ひとりの自由と可能性を確保していくためには、市民の自発的な取り組みが不可欠であると考えており、その意味で NGO など市民社会(シビルソサエティ)の役割が重要になってきている」と述べた。実際、NGO の活動の中には「人間の安全保障」に分類できるものが多い。
3. 近衛忠輝日本赤十字社社長は、緊急人道援助について官民が理念を共有することにより NGO の活動との相乗効果が期待できると指摘し、とくに、戦時と平時の区別が曖昧になり、危機が一層多面化・複合化していく過程での介入基準を明確にする必要性を説いている。
4. グローバル化された国際社会でグローバルな脆弱性が共有され、不安が広がる現在、真の「人間の安全保障」の実現は人類全体の希求である。グローバル・ガバナンスにおいても、リージョナル・ガバナンスにおいても、ナショナル・ガバナンスにおいても、そしてローカル・ガバナンスにおいても、「人間の安全保障」を共通の理念として政策的な実践に結び付けていくことが切実に求められている。
5. 1990年代後半から「人間の安全保障」は活発に議論されてきた。そして議論の時期を越え、脅威から人々を守り、それに対処できる能力をつけていくための実践が求められるに至った。カナダのカールトン大学ハンプソン教授は、人間の安全保障は公共財を提供できるかという視座から分析し、そのコストの負担分析まで試みている。

6 . 著者は人間の安全保障を明示的に政策フレームワークとして活用することを提案したい。そして真の「人間の安全保障」の実践のためには、政治、経済、社会から文化までを包括する戦略的、戦術的取り組みが不可欠であることを、あわせて強調したい。さもないと「人間の安全保障」は、所詮「ひ弱な花」で終わることだろう。前述のように地中にしっかりと根を張りつつあるこの「人間の安全保障」に美しいこの花を咲かせ続ける、そして逞しく育てるために、日本は「人間の安全保障」の理念を積極的に推進してきた責任を全うしなくてはならない。率先して「人間の安全保障」の規範作りに取り組むとともに国際社会への政策提言として、平和構築をはじめとする具体的な実践の施策を打ち出していかねばならないだろう。

P282 ~ 283

#### [コメント]

平和構築のフレームワークとしての「人間の安全保障」の推進は日本の外交政策とりわけ ODA の基本的概念として徐々に浸透してきた。平和国家としての日本らしさを体現するのに最もふさわしいのが人間の安全保障の考えと私も考える。著者の丁寧な論説に敬意を表したい。

- 2010 年 9 月 12 日 林 明夫記 -